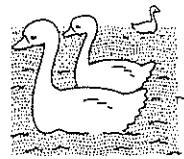


南同研大会

同和教育を全市民のものに——と十月十四日市民体育館を主会場に第十九回南同研同和教育研究会が開かれ、学校関係者ら約六百人が参加しました。午前中の全体会では、全国同和教育研究協議会事務局の稲垣有一次長が「くらしをみつめさせること」を題して講演。午後は十三の分科会に分かれて熱心に討議しました。今回は、全体会の講演について紹介します。



くらしを

みつめさせることから

同和教育実践の今日的課題

稲垣有一氏（全国同和教育研究協議会事務局次長）

今、子どもの生活のなかで、学校の占める比重がかつてないほど大きくなっていると思います。今の社会は学校を通してしか将来が見えなくなっています。学校のなかで最底辺のらく印を押された子どもたちは、自分の運命はここで決まったと思ってしまうをえませんが、それはこの社会にかなり厳然とした学力の世襲があるからです。そういう現実のなかで子どもたちが絶望せずに明るい未来を描けるようにするために、私たちは何をしなければならぬのかというところが、最近少しは見えてきたような気がします。

私の友人は、親の生活から学ぶとか、現実から学ぶということ

何かということを知って、それを子どもたちに伝えると、子どもたちの態度が変わったと言いました。今、大阪市の学校で差別事件がよく起きます。かつては知らなかったから差別をしたのですが、今は知っていて差別をしますが、教科書に部落問題が記述されるようになって、部落問題を避けて通れなくなりました。その当時はどの先生も一生懸命考えて、緊張を持ってそのことを子どもたちに伝えようとなさったと思います。ところが、いつの間にかその緊張はどこかに行ってしまった、子どもたちには「江戸時代の身分制度」「農工商えた非人」という言葉だけが伝えられていきます。その言葉

が被差別部落の人々をどれだけ苦しめ、傷める言葉なのかを抜きにして、言葉だけが一人歩きをします。そういう学習をしてきたのではないかということを、今しきりに言っています。全同教でもそのことをかなり重要視して、何年か前から部落問題学習の基本になることについて整理してきました。仮にそれを三つにまとめてみます。

一つめは、学習を進めていく上で、被差別の立場の子どもを中心に置いた学習でなければならぬということ。二つめは、生活と結びつけた学習をして、自分の暮らしをきちんと見つめさせることです。どの子

も暮らしの中でしんどいところがあります。それはなぜなのか、何なのかを見つめさせることです。それを通して、初めて部落差別の痛みに共感を持つ土壌ができるのではないかと思います。三つめは、仲間づくりと結びつけなければならぬということ。その子の立場になって、自分の生活をさらけ出しながらわかり合える関係、それがあって、初めて部落問題学習がみんなの学習になっていくと思います。また、今年全同教では、今まで教えてきた部落問題は正しかったのか、見直してみようと提起しています。同和对策審議会答申が出たときの歴史観は、部落は差別され、貧しかったということを証明しようとしたものでした。しかし一九七〇年代からの地方ブームの中で、豊かでもなかったが、貧しくもなかったこと、差別されてきたのは事実だが、その中でも非常にたくましく生きてきたという事実が発掘されてきました。部落は低いという認識は、転換しなければならぬと思います。今、子どもたちが起こしている差別は、間違った歴史観ゆえではないのでしょうか。

これは大阪市の先達の言葉です。「差別の実態の重さは、必ず伝えねばならない。しかし次の瞬間、